

稲積城の由来

おかし、貴族の世が乱れ、各地で武士が勢力争いをくり広げていた頃のこった。平治の乱と云って、都の武士たちが源氏側と平家側に分かれ、そこに地方の武士も加わる大きな戦いがあった。現在の那須烏山市周辺を治めていた那須一族は、その戦いの時、源氏側についたんだけど、源氏側は負けてしまった。それで、那須宗資は甲州（山梨県）稲積の里に隠れて時の来るのを待っていた。平治の乱から七年目のこと、都で頭が二つ、手が四本、足が三本の赤ん坊が産まれたんだ。そのうわさは口から口へと伝わり、今に何か恐ろしいことが起こるにちがいないと、人々の間に不安が広がっていった。陰陽師がうらなうと

「これは天下が東西二つに分かれる前ぶれである」
とのこと。時の帝は、世の乱れを収めるため大幅な恩赦を行くと、国中にお触れを出した。

那須宗資も、恩赦により、本国への帰還が叶い、その上、下野の武士の旗頭という重要な地位まで与えられた。

喜び勇んで故郷に戻った宗資は、祖父那須資道が築いた下境城を修復し、そのお城に入った。

宗資は、
「これも皆、稲積明神のご加護によるもの」
と、その御霊をお迎えし、那須家の氏神とし、城の北の方に立派な社を建て、盛大にお祭りをした。

不思議なことに、その年から社の後ろの大岩のところに、稲が自然に生え、秋には稲穂がたわわに実るようになった。これは鶴が種を口に含んで来て、蒔くんだとも言われた。

そんな豊作が毎年続いたので、下境城は、やがて稲積城と呼ばれるようになったんだ。

おしまい。

ひとコマ

この話は、「からす山の民話 第二集」をもとにした再話文です。原文では「資房・宗資の兄弟は」とありますが、第二集巻末の那須家の系譜に「一説資房ノ子宗資ト改名同一人」とあり、また稲積城縁起書には「須藤宗資が甲斐国から稲積城を勧請して帰国し、資房として那須物領を継ぐ」とあり、同一人物だった可能性が高いと思われます。

そのため、旧烏山町発行の「烏山町歴史年表」及び「烏山町郷土資料館のしおり」の年表との一貫性を図るため、宗資という一人の人物として扱いました。

なお、2009年に稲積神社で那須氏築城900年祭が開催されました。それは、宗資の祖父資道が1109年に下境城（那須城）を築いた年を基点としています。稲積城と呼ばれるようになったのは、このお話のように1165年宗資が帰国してからのことです。

下境の稲積神社では、毎年夏の終わりに五穀豊穡、風土安穩を祈願して下境佐々良獅子舞が奉納されています。この祭りは市の無形民俗文化財に指定されています。

文献（資料）

「烏山町史」「烏山町歴史年表」「稲積神社縁起書」「烏山町郷土資料館のしおり」